

# ハイ口通信 From 北区

第 16 号  
2023 年  
2月17日

発行責任者  
泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会  
共同代表 富田 素實江  
北 8 西 3 札幌市エルプラザ 2 階: レターケース 256  
TEL 090 - 7644 - 4379 FAX 011-726-7234

## 東京高裁 不当判決 巨大津波「予見できず」

# 東電旧経営陣二審も無罪



1月18日、東京高裁は東京電力福島第1原発事故を巡り、業務上過失致死傷罪で2016年2月に強制起訴された東電の勝俣恒久元会長ら旧経営陣3人の控訴審で、一審東京地裁に続き、無罪を言い渡しました。

控訴審の争点は巨大津波を予見できたかと、対策をとれば事故を防げたかの2点でした。

その判断の前提となるのが政府の地震調査研究推進本部が2002年に公表した地震予測「長期評価」の信頼性でした。

「長期評価」は巨大津波を伴う大地震の可能性を予測していました。

判決は、「長期評価は見過ぎせない重みがあった」としながら、「津波襲来の現実的な可能性を認識させる情報

だったとは認められない」とし、予見可能性を否定した一審判決を維持しました。

一審判決の「事故を防ぐには原発を停止するしかなかった」と対策を限定した部分も踏襲し、「電力事業者は漫然とした理由で運転停止できない」と結論付けています。

しかし、多数の専門家が参加する推進本部から巨大津波の警告を受けた以上、可能な対策を多層的に講じるのが原発事業者の責務です。疑問が残ります。

### 検察側が最高裁に上告

高裁判決後の記者会見で指定弁護士側は「科学的に解明できていない未知の地震・津波に対しては対策を講じる必要がないというのに等しい判決だ」と批判しました。

1月24日、検察官役の指定弁護士側が、一審に続き全員を無罪とした二審東京高裁判決を不服として最高裁判所に上告しました。

## ハイ口通信 15号 神恵内村に新聞折り込み

ハイ口通信第15号(2022年12月8日発行)は、神恵内村在住の滝本正雄さんの緊急・寄稿詩「核「ミ」処分場の「事故責任不在」のカラクリ」を掲載しました。

同月15日にハイ口通信を神恵内村に新聞折り込みで配布しました。今回で3回目です。  
神恵内村の人口は788人、462世帯(22年11月25日現在です。新聞折り込みは約350戸です。  
早速、村民から滝本さんのところに感想が寄せられました。

村民の声を紹介します。  
「国の偉い人たちは何を考えているのか、腹が立つ」  
「村民には内緒で処分場誘致を決めた村長や賛成議員はどう責任をとるのか、はつきりしてもらいたい」  
「子どもが小さいので内部被曝の遺伝による奇形児の誕生が心配です」  
「国や電事連が事故責任から逃げる事だけを考えているカラクリに腹が立った」  
「事故責任不在のカラクリを見破ってくれて有難う」  
「このカラクリが知らなければ住民が何の補償もなく被曝の犠牲になるところでした」  
「これからは処分場誘致に反対します」等など  
滝本正雄さんは、「これからも頑張りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます」と決意されています。



### 訂正のお詫び

ハイ口通信15号(2022年12月8日発行)の1面、見出し2段目、2面見出し「自己責任不在」を「事故責任不在」に訂正、2面2段目後ろから5行目、3段5行目、中文2行目の「自己責任」を「事故責任」に訂正し、深くお詫びいたします。

3・11から12年

シリーズ【福島を告発する】⑭

# 甲状腺がん患者の現状と課題 (上)

## ～県民健康調査が被ばくの影響を否定し続ける～

2023年2月3日

あじさいの会 千葉親子



はじめに

東日本大震災と、原発過酷事故があった年が卯年であった。あれから干支が一回りして卯年を迎えた今年、年数と共に、原発事故の課題も複雑多様化し「忘れさせないー忘れないー」の思いを込め新年を迎えた。

福島原発事故から12年を振り返ってみたい。

チエルノブイリ原発事故の経験から、原発事故による小児甲状腺がんの多発が懸念されるとして、福島県に、2011年5月「県民健康調査」検討委員会(以下検討委員会)が設置され、同年10月から事故当時概ね18歳以下の子ども約38万人を対象に、2年毎の甲状腺検査が開始された。

県民の被ばく線量の評価を行うと共に、健康状態を把握し疾病の予防、早期発見、早期治療につなげることを目的とし、福島県が県立医大に委託している事業だ。予算は国費(経済産

業省エネルギー庁)が約750億円、東電が250億円を拠出して約1000億円の「福島県民健康

基金」による、健康診査・甲状腺検査・妊産婦検診・心の健康調査の事業だ。

甲状腺とは、ホルモンを分泌する人体最大の内分泌腺で放射能被ばくにより、ヨウ素131Iが、甲状腺に取り込まれることで、がん発症が増加する。若い人ほどリスクは大きい。20歳以上は5年に1回の検査となる。

### 患者・家族との出会い

原発事故後、子どもが甲状腺がんになった話を話すこともできず、誰にも相談することもできず、家族が孤立し、思いを押し殺し、悩んでいる話を聞いた時、人と人が繋がらないかぎり、思いを語る場所がないと思った。

そんなご家族との出会いから、家族と当事者と支援者による「甲状腺がん支援グループあじさいの会」を立ち上げ、情報交換をしてきた。検査見直し縮小論の最中であつた。

会員の殆どが、がん告知時に「放射能の影響とは関係ないからね」と言われていた事や、患者に対する理不尽な対応が見えてきた。

### 放射能による因果関係を否定

2016年3月に行なった検討委員会の中間とりまとめでは「放射能の影響とは考えにくい」と報告された。

その理由に①将来的に死に結びつかないがんを多数診断している。②被ばく線量がチエルノブイリ事故と比べて小さい。③被爆からがん発生までの期間が短い。④チエルノブイリ事故と比較し、事故当時5歳以下の子どもの発見はない。⑤地域別の発見に大きな差がない。などを理由にしている。

1 巡目(2011年～13年)の検査で、穿刺細胞診(喉に針を刺し甲状腺から細胞を吸引し、取り出して調べる)で「悪性・悪性疑い」とされた人は(99%以上が甲状腺がん)116人、次の2年後の、2巡目検査(2014年～15年)で、71人の新たな患者が発見されたが、その中の65人は1巡目では「異常なし」と判定されていた。

### 隠蔽、過小評価とデータ改ざん

二次検査で、甲状腺がんを診断するまでに至らずに、一旦経過観察となったグレイゾーンの患者2500人以上は、その後、悪性腫瘍と診断されても県民健康調査の公表人数に入らない仕組み

ができていた事が明らかになった。

県は、「経過観察に移行されると医療保険対象となるので、県民健康調査では個人情報となる保険診療は把握していない」「県が決めたルールに従ってやっている」と、責任逃れのようなことをならべている。

また、県外で甲状腺がんを診断された患者も、県が公表する患者数に入っていなかった。国が2016年から行っているがん登録に含まれているはずだが、検診時に県外に転居していれば、福島県はその患者を把握しないままだった。

「経過観察」という数隠しの仕組みの中で隠れ患者がいたのだ。

検査医師の不足などから、民間病院で委託検査を始めるが、委託を受けるには、検査結果を子どもや保護者に伝えず、画像などのデータをすべて県立医大に送る事が条件になっていた。県に異議を申し立て、サポート事業(福島県は、18歳以下は医療費無料、18歳になると保険診療となり医療費の個人負担が発生するため、自己負担分の支援を行う県の事業)の対象になったが、今もがん登録に上がっていないも、県外患者として力

ウントされず医大は患者の評価

〈3面に続く〉



3・11から12年

シリーズ【福島を告発する】⑭

# 甲状腺がん患者の現状と課題

〈2面の続き〉

## ～県民健康調査が被ばくの影響を否定し続ける～

の独占をしていたとみる。

民間団体の「3・11甲状腺がん子ども基金」の給付者に当時4歳の子どもの申請がいたことが公表された5歳未満の悪性腫瘍者の存在が明らかになった。あじさいの会の会員にも当時5歳の会員がいた。

あじさいの会の会員で我が子の検査画像を開示請求した母親に対し、県立医大は「改ざんの恐れがある」として当初開示しなかった。

中立でなかった検討委員会座長

中立性が求められる検討委員会の座長星北斗氏が参議院議員選挙福島県選挙区から自民党公認で出馬した。

被ばくの影響を検証する委員会の座長が、在任中に原発推進政党の自民党から政界にと言う事は、検討委員会が政治的な要素を含み、中立とはとても言えない状況を作っていた事がわかる。

座長時代は「被ばくとの関連を否定」し、意見が分かれれば「私に一任を」と議論をさせず、幕引きをしてきた。彼は政府や福島県の意向に沿って、県民・被害者の方を向いていなかった。それは2011年5月、山下俊一が座長でスタートした県民健康管理調査会の「準備会」(秘密会)発覚前から始まっていたのだ。

隠ぺい工作は委員会当初から用意周到に作られてきた。

患者を置き去りにされてたまるか

甲状腺がんは、チエルノブイリ事故でも唯一放射能の影響を認められた健康被害であったため、国民の関心も高かった。小児甲状腺がんの多発が明らかになるたびに、誰もが原発事故と放射能の影響を疑い「避難すればよかったのか」「私が無用な被曝をさせてしまった」と親は自分を責めた。

一方で疫学専門家や一部の医療者が、「小児甲状腺がんは治療しなくてもいいがんだ」「検査をして見つけること自体が過剰診断だ」「必要のない手術をして過剰治療が行われている」という意見も声高に言われてきた。

それに対して患者たちは、怒りと、不信感を募らせている。「私は必要のなかった手術をされたの？取らなくてもいい甲状腺がんを取られたの？」「再発して、転移もして、アイソトープ治療をした、先行きも見えないのに過剰診断だなんて納得できない」「学校検診で見つけて早期発見でき感謝しているのに何で検査の縮小や廃止の話が出てくるの」「患者・家族は、このまま置き去りにされるような不安に駆られる。

アイソトープ治療を受けた子どもの辛さを聞いたことがあるのか！この様な被災者を置き去りにした検討委員会の公表やマスコミ報道に、あじさいの会は、患者家族と共に県や検討委員会委員、担当部に対して積極的に要請・抗議活動を取り組んできた。

2016年8月、内堀雅雄福島県知事宛に、甲状腺検査の見直しの報道に「甲状腺検査の継続と検査の充実を」求めた。

2019年6月、県民健康調査課宛に「福島原発事故に伴い急増している小児・甲状腺がん患者に対する要望書」を提出。この日は、患者本人が初めて交渉に参加をした。県職員曰く「患者本人と会って話しをするのは初めてです」とのことだった。

2019年9月、内堀雅雄福島県知事宛「県民健康調査、検討委員及び甲状腺評価部会の公正な委員選出及び運営に関する要望書」を提出。検討委員会に当事者の意見が反映されていない、患者を代表する委員の選出を求めた。

2022年2月、内堀雅雄福島県知事宛「定例記者会見に対しての抗議と質問」を出し県庁記者クラブで記者会見をした。

5人の首相経験者が、EU(欧州連合)に送った書簡の中に「多くの子どもたちが甲状腺が

んに苦しみ」という表現が含まれている事に対し知事は「遺憾である」と発言したことで、まるで、自分たちの存在を否定されたかのようである、患者や家族の憤りと絶望感が高まり、「差別や偏見がより強まる可能性を理解されたい」と抗議と質問文を提出した。答弁の期日を定めて、催促もしたが応じない。



3・11から11年

シリーズ【福島を告発する】⑭

甲状腺がん患者の現状と課題

〈3面の続き〉

今までも返答はない！！県の態度は、個別の対応はしないと言っ事らしい。回を重ねながら、「私も連れて行って下さい」「私も直接話を聞いてほしい」と要請行動に家族や当事者の同行は心強かった。

UNSCEAR2020/2021 1報告書の罪

原発事故後から2019年までに公表された、査読付き論文をまとめ昨年3月に公開されたこの報告書では、2013年報告書に比較し、放射性ヨウ素被ばく線量がより過小評価された。

2022年7月20日UNSCEAR(原子力放射線の影響に関する国連科学委員会)は、ギリアン・ハース前議長ら3人が来日し20日内堀雅雄福島県知事を表敬訪問し、「原発事故と甲状腺がん」被ばく線量は少なく、がんなどの健康被害は増加する可能性は低い」と結論付けた報告書を内堀福島県知事に届けた。

その日、私たちは県庁で、UNSCEARの一行に、「福島の小児甲状腺がん発症及び現状への直視を求める」直訴を行い、報告書の訂正を求めた。

約5カ月が過ぎた12月13日その回答が届いた。要約すると「今回の報告書は2019年までのデータしか参照していない」「原発

事故による健康被害は記録されていない」「被ばく影響は、非被曝対象群と比較しないと分からない」としながら「スクリーニングでは、臨床状態で見つかるよりも多くのがんを見つけ、その結果、過剰診断、過剰診療となる」と説明している。

まさに、原子力ロビーに都合のいい報告を重視し、事実を目を向けていないことがさらに確認できた。要望行動に対して内容には納得いかないもののUNSCEARからの答弁はあったが、福島県からの答弁は一度もなく、個々の対応はしないという態度を押し通している。

〈次号に続く〉

千葉親子(ちばちかこ)プロフィール

1947年…福島県会津坂下町に生まれる。(福島第一原発から110km圏)2000年〜2013年 会津坂下町町議会議員。

2014年…「チエルノブイリ救援中部」のウクライナ訪問団員として原発事故後28年目のチエルノブイリを訪れる。現在…甲状腺支援グループあじさいの会 事務局長

**甲状腺がん支援グループ あじさいの会**



甲状腺がん支援グループあじさいの会  
事務局: 千969-6573  
福島県河沼郡会津坂下町大字大沖字上野1170-1  
Tel: 090-8424-2398  
Fax: 0242-83-2964  
https://www.ajisainokai.net/  
info@ajisainokai.net

甲状腺がん支援グループ・あじさいの会は郡山を拠点に活動している小児甲状腺がん患者と家族、支援者による支援グループです。一部の専門家やメディアは福島県で見つかっている小児甲状腺がんについて、治療が必要のないほど「軽いがん」であるかのように扱っていますが、そんなことはありません。

当会では甲状腺がん患者が少しでもより良い治療を受け、より良い生活を送れるようお互いに情報共有しながら支え合っています。

代表世話人 牛山元美 (古びみ生協病院内科部長)



二男の母。原発事故後、被曝による健康影響を気にする母たちの声に応えながら、関東や福島県で甲状腺エコー検診を実施。ペラルスにて甲状腺検診研修も経験。関東子ども健康調査支援基金協力医。

甲状腺治療はもちろん、心やからだ、医療全般についての疑問にお答えして、皆さんがより良い医療を受けられ、不安も減らせるようお手伝いをしたいです。いろんな分野の専門医がいます。ぜひ気軽ににご相談ください。



事務局長 千葉親子(福島県会津坂下町元町)



精神障害者の家族の会を支援するなど福祉活動に取り組み、2016年に厚生労働大臣賞を受賞。精神保健福祉ボランティア「アピオラの会」会長。「ふるさと地域医療を志せる会津の会」会長。

原発事故が起きるまで甲状腺がんという病気はあまり耳にしませんでした。腫れが知らないうちで大きくなり、同じ悩みを抱えた方とお話が話し合うことで癒しを感じます。情報と課題を共有し、そこから希望をつかみましょう。



# 歴史から見る放射能障害

## 人はどう放射線被バクを経験して来たか (2)

室蘭工業大学 名誉教授 宮尾 正大

### 目次

はじめに

レントゲン、X線発見

〈ここから前号に掲載〉

ベクレル、自然放射線発見

キュリー夫妻、ラジウム発見

医療利用

裏に隠された悪魔の爪

〈ここから次号掲載〉

ラジウムフィーバー

そして悲惨な事件が

被バクと追いかける規制

戦争の時代

フォールアウト

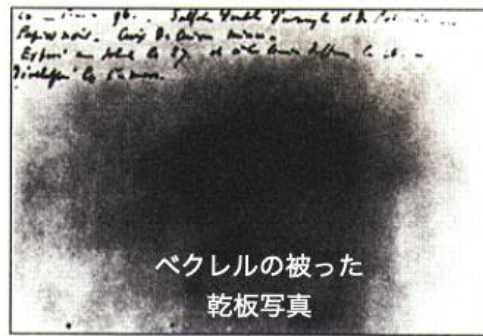
平和利用の果てに

残された課題

### ベクレル、自然放射線発見

レントゲンのX線発見の次の1月、フランスのポアンカレはX線が蛍光や隣光を帯びたガラスから出る事、また蛍光を出す力があることから、蛍光を出す物質からも出ているのではないかとこの考えを示します。その1ヶ月後の2月、フランスのベクレルは強い隣光を出すウラン化合物の硫酸ウランカルウムもX線を出すのではないかと考えます。隣光を出すために化合物を強い

太陽光に当て、放出するであろうX線を下に置いた遮光乾板に感光させました。



ベクレルの被った乾板写真

ところが実験中、天候が優れず日差しが当たらないため、鉱石と乾板をそのまま机の中にしまい込んで放置します。そして鉱石乾板を光に当てなくてもそのまま机の中にしまい光に当てなくても、長い時間置くほど強く感光することに気がついたのです。ウラン鉱石を日光に当てた時間ではなく、乾板上においた時間が感光に関係するという事実は、日光とは関係なく何らかの「線」がウラン鉱石から自然に放出されていることを示したのです。

さらにこの「線」はX線と同じように空気を電離し、物質ウランを含んでいけば化合物に関係なく放出され、水溶液だろうと結晶だろうと関わりがありませんでした。天然の物質からX線のような「線」が自発的に放出されることの発見です。

なぜベクレルはウラン鉱石を実験に選んだのでしょうか。実はベクレルの父親は、その当時は珍しい物質であったウランと言う物質を専門に研究していました。ウラン化合物はベクレル家代々の関心を寄せていた物質だったのです。

実験を続ける過程でベクレルは気がつきます。彼の見ている「線」は写真乾板を感光させることは似ていますがX線とは全く違った「線」だったのです。ベクレルはこの「線」を「ウラン線」と名付けます。この「線」は発見者にちなんで「ベクレル線」とも呼ばれます。

この発見を聞いて科学者は困惑します。「決して壊れないと信じられていた原子核」から何か放出されるのです。原子核よりさらに細かい構造がある。そして放射性原子核は自然に壊れる。その時のエネルギーは信じられないくらい大きいと。科学の常識が崩れた瞬間です。

### キュリー夫妻、ラジウム発見

ベクレルの報告は、その「線」の強度が強くなかったためあまり注目を浴びませんでした。しかしその論文に感銘を受けた人がいます。ご存知マリイ・キュリーです。1897年、彼女は博士論文のテーマを探していました。夫ピエールの「面白そうじゃないか」と言うアドバイス、それに「新分野だから他の論文を読まなくても済みそう」と「ウラン線」をテーマに選びます。

マリイはまずウラン鉱石のピッチブレンドからウランを抽出することから始めます。来る日も来る日もウランを含むクズ鉱石を手作業で砕き、酸で溶かして不純物を取り除きました。

ピッチブレンドは瀝青ウラン鉱石の別名で、当時ポヘミアの鉱山で取れました。品質の良い鉱石は高価なので研究費では買えず、ウランを分離した後の廃棄残渣を無料で手に入れて分離に挑みます。硫酸で溶解しアルカリで中和して取り出す作業です。この時夫妻は気がつきます。抽出したウランに比べ、融解されずに残った残渣の方がはるかに強い「線」を出すことに。そしてその中から最初にポロニウムが、続いてラジウムが分離されたのです。1898

# 歴史から見る放射能障害

<5面からの続き>

年のことです。

夫妻はこの放射される線を「放射線」と名付け、自発的に放射線を放出する能力を「放射能」と名付けます。ちなみにポロニウムは彼女の祖国ポーランドから名前をもらい、ラジウムは放射するものの意味から名前がつけられます。

ラジウムがなぜ残渣に多く残されたのでしょうか。それはウランが硫酸に溶けるのに比べラジウムやポロニウムは硫酸には解けない化学物質だったからです。そして残渣の方が放射能が強いことがわかったのは、夫ピエールが卓越した実験科学者であり、従来用いられていた写真乾板に代わり電離箱やキュリー式電気計、ピエゾ電気計（ピエールの発明品）を用いたことで、定量的な計測ができたことが大きいようです。

## 医療利用

X線の発見は、レントゲンの手の骨の撮影から始まったように、直ちに医療への応用が試みられます。医師たちはその有用性にすぐに気がつきます。出回っていた装置、見えないものが見えると言う衝撃的なニュース、1896年5月にはエジソンによって博覧会に出品され長蛇の列がで診断に利用されます。骨折、体内

に残された銃弾の抽出、などなど。そして1914年から始まる第1次世界大戦の戦争の時代になり、大量に生まれる傷病兵の治療に使われることとなります。

X線が皮膚障害を引き起こすことがわかると、すぐにガンの治療に使うことが試みられます。1896年には舌ガン、胃ガン、乳ガンに。

ラジウムも同じ道を辿ります。ピエール・キュリーはラジウムから放出する放射線が皮膚に損傷を与えることを見つけ、自ら実験してその有用性？を実証します。1901年ピエールはラジウムの医療利用を進めます。ラジウムをガンの治療に使うのです。当時不治の病と恐れられていたガンの治療に有効だと。ヨーロッパに多い皮膚ガンによく効くと。1902年には子宮ガンに使われ、その有効性が認められました。まだ誰もその恐ろしさを知らないまま。



癌の治療に用いられたマスク。ラジウムをマスクに収めて使った。

ラジウムの治療は画期的でした。人々はラジウムの持つ魔法のような魅力？に取り付かれます。ガンから始まって顔のシミ取りまで。



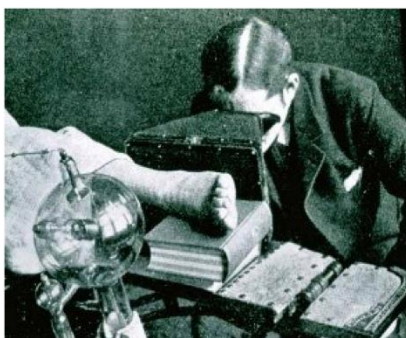
顔のシミを取るためにラジウム照射する患者たち

## 裏に隠された悪魔の爪

レントゲンが感じた不吉な感覚は思わぬ形で襲いかかります。治療を受ける患者ではなく、X線を使う医

師とその装置の製造者たちへ牙を剥いたのです。しかも牙には絹の衣が被っていました。

医師たちは患者を診断するとき、何の防護も取らずに患者の前に立ち、光る蛍光板を覗き込んで診断しました。誰もX線の恐ろしさを知らないまま。





# 歴史から見る放射能障害

<6面からの続き>

最初にX線の爪にかかったのは、エジソンとその仲間たちです。エジソンは自身の発明した白熱電球に変わる、もっと明るい光源をX線を使って作ろうと考えました。エジソンはガラス職人でもあった（なにしてX線装置を作るにはガラス細工が必要でしたから。6面・左下の写真の手前にあるのがX線発生装置です）チャールズ・M・ダリーを助手に雇い、X線で明るく光る蛍光材料を開発しようとしています。来る日も来る日もダリーはX線管を前にして蛍光スクリーンを目で確かめていました。危険だとは思っても寄らずに。しかしエジソンはある日ダリーの目の焦点が合っていないことに気がつきます。エジソンは「X線は私の助手ダリーに悪影響を与えた」と記録しています。

やがてダリーは頭髪が抜け、顔にシワが増え、まつげと眉毛が無くなり、左手の甲には病変が現れます。ひどい痛みがなくなったヒリヒリする感じが耐え難い痛みに変わり、皮膚移植が必要になり、血管はスタブタに切れ、小指の付け根にはガンが発生しました。ダリーは左手首切断、右手に深い傷ができて指4本切断、そして最後には片方の肩から、もう一方は肘からの切断の後1904年、8年間の闘病の末亡くなります。

エジソンはダリーの死に震撼しま

す。「ラジウムとポロニウムは恐ろしい、これ以上関わりたくない」の言葉を残して、蛍光灯の開発を中止します。

放射線の実験で、あびるほどX線を浴びていたと推定されるテスラも実験中に奇妙な違和感を感じていました。レントゲンの論文を見た後、テスラは自分の感じたことを公表する事が意義あると考え、1896年に「エレクトリカル・レビュー」誌に三本の論文を書きます。内容は「例えば、眠くなったり、時間が早く流れるように感じる」「麻薬より安全な睡眠剤」「皮膚に有痛性の刺激、炎症、水膨れ：開いた傷口ができることもある」「他の人がこのような目にあわないよう」X線避けるようにと忠告し、「レントゲン線（X線）は明らかに危険である」と言うものでした。この一連の論文は不思議な未知の光線の危険性に触れた初めての論文です。

放射線による障害は、さかのぼれば16・7世紀のチョコ、ボヘミアの鉱山病まで遡れるでしょう。すでに見たピッチブレンドの鉱山です。鉱山で働く鉱夫の若死の原因、鉱山病です。ラジウムによる肺ガンです。その後X線の発明による皮膚障害が1886年ごろから始まり、1904年には外部被曝（まだそんな言葉

はありませんでした）を避けるための三原則（距離、時間、遮蔽）が認識されるようになります。放射線による殉教の第一波です。そして第二波、放射線医師や放射線製造業者の白血病発症による殉教が続きます。第2波は1920年ごろより始まります。1909年、レントゲン線協会会長は「保険会社は我々を好ましくないリスクを抱えた集団とみなし始めている」と嘆かせます。

〈次号に続く〉



## ☆読者の声

### ハイロ通信は貴重な出会い

宮崎良子 (関東在住)

2021年3月、バスツアーで福島を訪れた時、車中で配られたハイロ通信は、私にとって本当に貴重な出会いとなりました。書かれている記事のどれもが分かりやすく、説得力がありました。

西尾先生の「トリチウムの健康被害」は衝撃的で、「被曝インフォでミック」をすぐ買って読みました。

私はがんセンターで働いています。平和活動を続けるなか、被爆者を思い核兵器廃絶を訴える一方でがんセンターに毎日1000人以上訪れるがん患者さんと被爆者って、一体何が違うのだろうと疑問に思う日々です。これからハイロ通信が放つ光に導かれて、前進していききたいと思います。

## 宮尾正大氏

### プロフィール

1967年 東北大学大学院卒

1986年 静岡大学 電子工学科 学研究所 助教授

1995年 室蘭工業大学 工学部 教授

室蘭工業大学名誉教授

現在「原発やめよう！ 登別の会」代表

「泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会」では、2019年9月30日、宮尾正大氏に講演をして頂きました。

## ☆意見・感想・投稿をお寄せ下さい

ハイロ通信についての意見、感想や原発について想うこと、考えていること等々、お寄せ下さい。

### ☆北区の会に入会ください。

北区の会に入って廃炉の活動をしましょう。会費は年1口(千円)以上。

～原発を動かさない・核ゴミは持ち込ませない～



フクシマから12年、原発と核ゴミを考える3.11集会

第2部

# 小出裕章さん講演会

## 核のゴミと、でたらめな原子力政策

東京電力福島第一原発事故から12年、いまだ日本は原子力緊急事態宣言下にあります。しかし日本政府は原発事故への反省をなかなか捨てて事故以前の原発政策に回帰しようとしています。一方、北海道では、NUMOによる核ゴミ最終処分場選定のための文献調査がほぼ終了し、次の段階であるボーリング調査(概要調査)に進むかどうかの瀬戸際に立っています。2023年3月11日、ともに集い、泊原発の再稼働を許さず、核のゴミを持ち込ませないために何ができるのか、一緒に考えていきたいと思います。

オンラインの参加も可能です。

日時

2023年  
**3月11日(土)**

開場14:00～ 開会14:30～

会場

北海道自治労会館  
**4階ホール**

札幌市北区北6条西7丁目

参加費

1,000円(事前予約不要)

<コロナ対応>

コロナ感染症対策のためマスク着用、検温・消毒にご協力ください。

<Zoom申し込み>

(Zoomによるオンライン参加を希望の方は下記の連絡先アドレスにメールで申し込んでください。その場合カンパ金の振り込みをお願いします)

<申込期限>

2023年3月5日(日)

フクシマから12年、原発と核ゴミを考える3.11集会 **プログラム**

第1部

**今、伝えたいこと**

穴戸隆子さん  
福島から原発で自主避難

佐藤英行さん  
後志・原発とエネルギーを考える会

三木信香さん  
子どもたちに核のゴミのない寿都を!  
町民の会

第2部

**小出裕章さん講演会**

小出 裕章 (こいでひろあき) さんプロフィール

1949年、東京都生まれ。日本の工学者(原子核工学)。東北大学工学部原子核工学科卒業、同大学院工学研究科修士課程修了(原子核工学)。元京都大学原子炉実験所(原・京都大学複合原子力科学研究所)助教。(2015年定年退職)研究分野は原子力安全、放射性物質の環境動態解析。1970年、女川での反原発集会への参加を機に、原発をやめさせるために原子力の研究を続けることを決意。以後現在まで一貫して「原子力をやめることに役に立つ研究」を行なっている。

『原発ゼロ』(幻冬舎ルネッサンス新書)、『100年後の人々へ』(集英社新書)、『原発のウソ』(扶桑社新書)、『アウト・オブ・コントロール 福島原発事故のあまりに苛酷な現実』(共著。花伝社)『原発事故は終わっていない』(毎日新聞出版)等、著書多数。

主催

泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会  
(略称:泊・核ゴミNO!道連)

Mail



URL



連絡先

3.11 集会事務局 (電話番号) 090-9524-7531 (井上)

(メールアドレス) [tomarikakugominodoren@gmail.com](mailto:tomarikakugominodoren@gmail.com)

(URL) <https://tomari-no-doren.jimdofree.com>